

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年六月一日発行(毎月一回一日発行)
第十五卷第二号(通巻第一七〇号)

鈴



ぐろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第170号

6. 2008

華燭

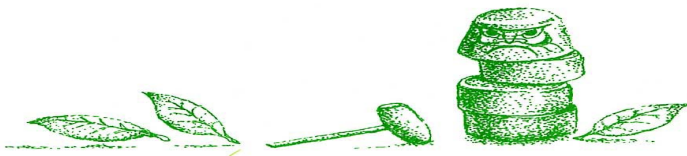
品川 鈴子

新生児出づる戸外はあいの風

菖蒲湯に升搔き手相嬰開く

走り梅雨心配ふくろ囊また綻び

青き峰隔てて母校ある夫妻



恩塚明子様

華燭祝ひに梅雨逃げのカナダ行

薰風に撞く梵鐘のマーチ調

六月の婚水晶の数珠交はす

婚菓切る菖蒲あやめかざりに刃を当てず

婚の庭兎も栗鼠も現れる

薔薇どつさり抱へ新婦の実家さとがえ帰り



玉

鈴

吟

香川 大空純子

卒業日メールアドレス交換す
卒業歌腹まで響く男子校
弁当を褒められ母も卒業す
卒業日ただおいしいと寿司を食べ
ただひとり引越近づく木の芽時

兵庫 岡 有志

何れの部採るや新入生のひげ
老の身は海の日染みし鰯食ぶ
燦爛と波潜り出て対の鳩
草餅を食べてひとりの津軽弁
受難節ちくちく痛むすぐ緩む

埼玉 岡田 章子

雛段のミッキィ、ドナルド威儀正し
バス停の寄り目となりし雪だるま
あくと言ふ純白の泡味噌煮る
ぼたん雪傘さして入る露天風呂
潮干狩顔まで泥をはね上げて

愛媛 岡野峯代

亡き祖父へ卒業証書を土産とす
堂塔の陰雪ふめば舍利舍利と
賽銭を固握りして涅槃経
涅槃西風撥つまづきて口三味線
怒られて「ややこし」と拗ね日脚伸ぶ

大阪 岡本 幸枝

黄檗紙の印字ぼやける風邪の神
おしくらまんじゅう六万枚の経版木
うららかに雲中菩薩の括れ腰
春風駘蕩まだゆとりある布袋腹
老将の果てて紫紺の竜の玉

大阪 奥田 妙子

梅日和平等院の鳳凰に
阿弥陀佛白毫光り雲雀鳴く
春浅し黄檗紙に刷る一切経
鶯の一鳴きに覚め朝の晴
叡山も雪化粧なす湖の昼

兵庫 勝野 薫

早春展絵地図頼りに乗り継ぎで
バロック画廊二周目はコート脱ぎ
桜東風茶室三畳開け放す
遠霞車中連句で時忘れ
弥生馬場少女ポニーでVサイン

兵庫 金田美恵子

水口に小さき鳥居御田植祭
神の田のお玉杓子も祓はるる
神の田に恐る恐る入る御田植女
農を守る村なり御田植祭を守る
古代米醸せし甘酒いただけり

徳島 河井富美子

御母衣ダム雪に囲まれ静もりぬ
朝市の客を待ちあゐる膝毛布
白さぎと見まがふ松の残り雪
赤ろうそくゆれてすくみて雪の夜
啓蟄や宇宙発射も近づきぬ

兵庫 川合まさお

兄の忌に独楽を廻せし道帰る
漁上がり話のはづむ磯焚火
莫座に干す湯搔き若布の青さかな
海苔箸の油を流す人無口
紙雛作りし園児の顔うかぶ

大阪 河村 泰子

和墨つけ版木つやややか寒の蔵
天井まで版木積む嵩蔵寒し
梅の寺長押に残る宝相華
春風とホップステップ下校の子
雛しまふ箆笥のとつて欠けしまま

東京 岸 はじめ

囚人に初老の母や鳥雲に
山寺に物見の窓や雁帰る
泥沼をS字に伸びる蝌蚪の紐
族睡る山墓に今日辛夷咲く
水車吐く水の細さや風光る

東京 北川とも子

春光のはらはらと旅始まれり
糸杉に春光まとひつきにけり
羊等の犇めきあひて春の朝
朝霞満月透けて残りをり
どこまでも山なだらかに草萌ゆる

東京 北川 明子

あの枝に今日もあの鳥水温む
中学校灯点し受験期真最中
数独と俳句三昧雪籠り
白木蓮心を空へ立て直す
うららかや鴨もあひるも草の上

薬草歳時記

(一六九) ラベンダー

三輪慶子

屈み見るラベンダーより翅音立つ

和田 幸八

ラベンダーの花は小さいので、この句のようについ顔を近づけて覗き込みます。栽培しやすい種類と難しいものがあるようです。シソ科ラベンダー属、常緑の半木本性で交雑しやすい様々な品種があります。

誰にも好かれるラベンダーの香りですが、この香りに薬効があります。ハーブの中でも最もポピュラーなものです。が、歴史は古く古代ローマ時代から使われていました。古代ローマ人はラベンダーを浴剤にしたり洗濯に使って芳香を楽しみました。ラテン語の *lavare* (洗う) からラベンダーとなったとする説もあります。乾燥ラベンダーは虫除けになりますので、大切に保管する *to dry lavender* という成句もありヨーロッパの暮らしに関わってきたことが思われます。

日本では文化年間(一八〇四〜一八)に記載があり、当時すでにヨーロッパから渡来していました。主産地はフランス、イタリア、スペインですが、オーストラリアでも営利生産されています。日本では北海道、長野県で栽培され

ていることはご存知のとおりです。

ラベンダーの芳香を放つ精油の成分は種類によっても産地によっても異なりますが、主成分は酢酸リナロールです。八分咲きの頃の花穂が一番多くの精油を含むので、蕾が咲ききらないうちに収穫するのがいいようです。生の花穂を水蒸気蒸留してラベンダー油をとり石鹼や化粧品の香料とします。茎も葉も精油を含みますが花穂からのものが質がいいのです。アロマテラピーがもてはやされてシヨップも多くなりました。手づくりの化粧品には必須の香りです。

また庭や畑の隅のハーブガーデンで花を楽しむ方も多いでしょう。畑の縁取りに植えてコンパニオンプランツとしても注目されています。薬剤を使わずに害虫を防いだり虫の天敵となる生物を温存したりする働きです。

収穫は花が四、五輪開きかけたときに切り取り、陰干しして乾燥します。蕾をしごいて集め、乾燥剤を入れて密封し容器に保存しますと長持ちします。自分で育てた生の花ならば、砂糖をまぶしてペースト状の砂糖菓子として楽しむこともできます。ハーブティは勿論のことです。

精油の芳香に鎮静作用がありますので鎮痛、精神安定剤として使われます。ラベンダー浴は自律神経失調症、婦人の更年期に有効です。薬草浴は鼻粘膜の嗅神経を刺激し間脳に作用します。精油の持つ芳香には軽視できない薬効があると言われています。不眠症にはラベンダーバスの後にポプリの効いた安眠枕はいかがでしょう。

参考文献「植物療法」R・F・ヴァイス

著者略歴神戸薬科大学卒

ラベンダー [ラバンジュラ属] (しそ科) (英) Common Lavender. True Lavender

Lavandula stoechas (英) French lavender, *Lavandula angustifolia* (英) English lavender
(フレンチラベンダー) (イングリッシュラベンダー)

穂状花序の頭頂に
4枚の花弁

花は穂状花序に青紫色の小花
葉は対生、無柄長さ2~5cm
楕円状線形又は狭披針形茎丈
30~90cm全株に白色の軟毛

須賀
悦子
画



蕾



薬用部分：花
花期：5月~6月

E. S.

鐘の鳴る丘のなぞへはラベンダー

ラベンダー畑や夕日を瑠璃色に

ラベンダーの風が押しゆく地平線

ラベンダー風呼ぶ彩に暮れにけり

ラベンダー空にひろがるペルシャ織

火の山の裾より青しラベンダー

雲に匂ひうつしてラベンダー畑

ラベンダーその広がり湖の蒼

ラベンダー咲く畑の果て十勝岳

遙かなる山に噴煙ラベンダー

森田 峠

青柳志解樹

青柳 照葉

大西 岩夫

加藤富美子

木村 敏男

酒田美代子

勝野 薫
(ぐろっけ)

佐方 敏明
(ぐろっけ)

塩出 眞一
(ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

鮎子を詠まねば市長賞逸す 兵庫 土屋 利之

遠足の児ら総登城淡路見に
外灯のまわりだけ雪降りつづく
乳匂ふねんねを着てポストまで
ヒヤシンス過去を断ち切るシュレッダー 大阪 宮村フトミ

掌を合わす列車の窓になごり雪
逆縁の卒寿の母に春の虹
花時計文字を啄む寒雀
たびら雪払ひて受くるエアメール トロント 恩塚 典子

春浅し櫂の枝すべて天を指す
汚れ雪残して流る雪解水
青天下春日に光る庭の松
水琴窟にかがむ女童花馬酔木 神奈川 永塚 尚代

立ちつくす桜が闇に溶けるまで
春宵の香に満つ野辺にひとりなる
白鷺の蓑毛を揺らす春の風
圧力釜しゅぽしゅぽと春の昼 岡山 岡 敏恵

春キャベツ千に切る子の大らかさ
文旦に親指あぐむ五十肩
おもしろくなくて春泥ふんでみる
雛あらればやいやいやを覚えをり 兵庫 岡村 尚子

里帰りの荷を解きをり春の虹
母の忌の大鐘を打ち冴え返る
おぼろ月久しく父を訪れず
いつからか口癖ひよいとおぼろ月 兵庫 西田 敏之

野良猫のついぞ失せしか落椿
棚霞子ら吸いこまる始業ベル
バス席の残り香濃かり春の宵
浄瑠璃寺あせびに続く門低し 兵庫 明石 文子

私流旧き暦にひな飾る
卒業し横一列に下校せり
父と娘の確執いまだ春の川
三年間図書委員して卒業す 香川 横内かよこ

秀

鈴

記

巻頭 三句 品川 鈴子 評

四句／十五句 栗田 武三

*選句は全て 品川鈴子

鮎子を詠まねば市長賞逸す

土屋 利之

明石海峡には「こうなご・いかなご」と呼ぶ小魚の大量が春になると浅海へ押し寄せ、「芭蕉七部集」にも登場する。漁の盛んな時期に佃煮「釘煮」を挙って作り、明石の名産でもある。市民俳句大会では、大賞の明石市長賞は、やっぱり鮎子の句に攫われた。出句を選ぶとき常套的な句材を避けたのが悔しい。

ヒヤシンス過去を断ち切るシュレッター 宮村フトミ

ヒヤシンスはギリシャ神話の美少年の名で、太陽神アポロンに愛された少年。円盤が頭に当たって死んだとき、血に染まった草から咲いた一本の花といわれる。「しとやかな可愛らしさ、初恋のひたむきさ」紫は「悲しさ」等の花言葉を持ち、和名は風信子、飛信子。

追憶を文明器機で細かく刻んで捨てたいけれど、感情はもつと御し難いもの。

たびら雪払ひて受くるエアメール 恩塚 典子

淡雪、牡丹雪、かたびら雪、泡雪等々、春になって気温が上がる頃の雪は、水分も多く解けやすい。結晶同士がくつき易いので花びらのように美しく、厳寒のトロント郊外にもようやく春の兆し。折しも届いた故国からの航空便に、やわらかく降りかかり、手で払いながら受け取るうれしさ。

水琴窟にかがむ女童花馬酔木 永塚 尚代

ひとりの女童が水琴窟に屈みこみ、小さな点滴の音に耳を澄ましている。頭上には馬酔木の花が満開。華やかだが静謐な情景だ。七七五の破調も長閑で心地良い。

おもしろくなくて春泥ふんでみる 岡敏 恵

おもしろくないと仰っているが、面白い句だ。分別のある大人が春泥を踏んで子供みたいな気晴らしをされておられる。口語体ですばつと言いきった句柄も好ましい。

おぼろ月久しく父を訪れず 岡村 尚子

同時出句に母の忌を詠まれたものがあるので、父上は寡暮らしをされているのであらう。せめて顔だけでも見せに行かねばと思いつつも、久しく無沙汰が続いている。その自責の念をおぼろ月に託された。余情が深い。

野良猫のついで失せしか落椿 西田 敏之

家の周りにいつも同じ野良猫を見かけるようになった。棲みつかれては困るので、見つけ次第追っばらうがすぐにまた戻ってくる。しかし、ふと気付いてみると彼（彼女）の姿が何時の間にか消えていた。庭には落椿が黙然と転がっているだけ。ほっとした気分の裏に、そこはかかない

喪失感が漂う。

父と娘の確執いまだ春の川 明石 文子

厳しい父に娘は反感を持ち、勝手な娘に父は憤る。一時のことならまだしも、この確執はなかなか解消されない。よくあることだが気の重いことだ。お互い春の川のようにつまらない蟠りを流し去ることができればいいのだが。

しゃぼん玉飛んで行きたい所あり 横内かよこ

この句、しゃぼん玉で切れていると解したい。自由気俣に飛び去って行くしゃぼん玉に託して作者の心境を述べられたのであらう。人間誰しも叶わぬ夢を持ち続けるのだ。

姿見に笑顔ながし目春着の子 村田とくみ

お正月用の新調の着物を纏った少女が、姿見の前で色々な表情を作って悦に入っている。ながし目まで演じているところを見ると、そろそろ一人前の女にさしかかっているのであらう。情景鮮明、楽しさ一杯。（以下略）